

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531017

研究課題名(和文)ESDを推進するための教員リーダー養成プログラムの開発

研究課題名(英文)The development of the teacher leaders training program to promote ESD practice

研究代表者

中山 博夫 (NAKAYAMA, Hiroo)

目白大学・人間学部・教授

研究者番号：80406561

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：ESDを推進する教員リーダーを養成するプログラムを開発することが、本研究の目的である。教員リーダー(実践に近いミドルリーダー)を養成することを通して、学校現場にESDを浸透させたいと願った。そして、以下の要素が入ったプログラムが大切であることがわかった。自由な対話ができる教員集団の成立、協働できる同僚生の成立、ESDの基本理念の習得、実践を推進する教員のロールモデル、ESDの授業実践による児童・生徒の成長の確認である。そのための具体的な研修プログラムを作成した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop the training program for the teacher leaders who will promote ESD practice. We do hope to establish ESD practice in the school field through the teacher leaders training. And we recognized that 5 factors below are important for the program. No.1 is existence of teachers' group which they carry on constructive dialogue freely. No.2 is existence of teachers' collegiality. No.3 is learning of fundamental ideas for ESD. No.4 is existence of role models of advanced teachers who have the driving forces toward ESD practice. No.5 is recognition of children's growing up by ESD practice. We made the concrete training program which has 5 factors.

研究分野：教育学

 キーワード：ESD 教員リーダー ミドルリーダー 共創型対話 参加体験型アクティビティー コミュニケーション
 ・アクティビティー 授業研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 国連 ESD の10年

ESD の運動は、日本政府と NGO の提案に基づき国連が承認した、ユネスコ主導の教育革新運動である。日本は、2002年のヨハネスブルグサミット（「持続可能な開発に関する世界首脳会議」）において、ESD を国連10年運動として取り上げることを提案した。そして、同年末、国連総会は「ESD の10年」（2005年～2014年）を満場一致で採択した。そして、ユネスコが主導機関となった。

日本国内では、2006年、内閣府に設置された「ESD の10年関係省庁連絡会議」が、「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」を策定した。その実施計画では、最終年である2014年において、「一人一人が、世界の状況や将来の世代と、現在の社会や自分との関係を見つめ、自らが生きる社会を持続可能な社会とすべく、その社会づくりに参画すること」が目指されていた。

(2) 学校現場の状況

2014年に、総括世界会議が岡山市と名古屋市で開催されることが決定されていた。岡山市と名古屋市の状況を調べてみた。

岡山市では教育委員会とは別部局で ESD を統括していた。地域の団体と学校教育との関係をコーディネートし、環境に重きをおいた実践が推進されていた。だが、研究校以外の教員にインタビューしてみると、ESD がほとんど浸透していないことが感じられた。ESD という用語すら聞いたことがないという教員も散見していた。

名古屋市では政治家が主導しており、一部の学校が指名されて、児童・生徒に学習

活動を発表させる計画が進んでいることが分かった。発表が予定されているユネスコスクールにおいても、ESD という言葉は使われていても、何をどうするのかと議論を進めている段階であった。

2. 研究の目的

(1) プログラム開発

本研究の目的は ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）を推進するための教員リーダーを養成するプログラムを開発することである。ESD は緊急の世界的な教育課題であり、それを推進する教員リーダーの養成は必要且つ重要な課題である。

ESD は、持続可能な社会の担い手を育てる教育である。地球温暖化、熱帯林の消失、オゾンホールなどの地球環境問題、世界各地で頻発する紛争や蔓延する疾病、富の格差の拡大、原子力発電所の安全性の問題などが顕在化している。これらの問題は、人類に持続不可能性という脅威を突き付けている。そのような厳しい時代を逞しく生きる子どもたちを育てることが、現代の教員には科せられている。つまり、ESD を推進する資質能力が、教員に求められているのである。ESD を推進する資質能力を備えた教員リーダー（実践に近いミドルリーダー）を育て、ESD を推進することが研究代表者・研究分担者の願いである。

(2) ESD 実践の普及

本研究は、ESD の地道な実践を定着させることを意図している。持続可能な教育活動を推進したいということが、研究代表者・研究分担者の切なる願いである。ESD の授業実践を牽引する研究主任や実践研究推進を担

っているミドルリーダーを育成することによって、学校現場に ESD の考え方や地道な実践を広げていきたいと願ったのである。

3. 研究の方法

(1) プログラム開発

ESD を推進するための教員リーダー養成プログラムを、以下のように開発する。

①1年目：(a) ESD 推進の必然性と切実性を実感させるための体験的プログラムと (b) ESD 推進のために必要な教員としての役割遂行能力を育成する体験的プログラム案を教材も含めて作製し、研究協力者を対象として実施して、そのデータを分析してプログラム案を修正する。

②2年目：修正した (a)・(b) プログラム案を実施し、さらにプログラムを洗練させる。(c) ESD の理解とその授業を開発しようとする教員を養成する授業研究的プログラムを、名古屋市国際理解教育同好会と協働し、授業研究と教員の意識変容との関係を調べつつ研究開発する。

③3目：(a)・(b)・(c) のプログラムを学校現場の研究協力者と協働して研究し、それらを完成させる。

(2) 研究協力団体との協同

名古屋市国際理解教育同好会の研究協力を得て、協働して ESD の教員研修と授業研究を行い、参加教員の意識変容に関するデータを収集し分析し、プログラム案に修正をかける。

4. 研究成果

(1) ESD を推進する教員

ESD を推進する教員は、ESD に依拠す

る価値観やものの見方・考え方と共に ESD の学習指導方法に精通している必要がある。多田は、ESD を推進する教師の役割として、企画・構想者としての役割、支援・援助者としての役割、共創者としての役割、学習者としての役割、先導者としての役割を示している。これらの役割とは、ESD の価値観をもって、児童・生徒と共に学びながら、参加体験型の学習を支援・援助したり、時には先導したりする教員の資質能力であると考えられよう。ESD が育みたい力とも併せて、ESD を推進するために必要な教員としての資質能力を以下のように整理してみた。

- ①持続可能な社会・発展に関する価値観
- ②体系的な思考力・代替案の思考力
- ③情報収集・分析能力
- ④コミュニケーションを駆使して、参加体験型の学習を指導する能力

順に説明したい。

まず、①持続可能な社会・発展に関する価値観についてである。現在の地球社会がおかれている厳しい状況を認識して、世代内・間の公平を求めて、調和のとれた社会の構築に価値をおき、そのための学習に向けて積極的に行動する意志力をもっていることが、ESD を推進する教員には必要である。教員の生活は多忙である。多忙な生活の中にあっても、持続可能な社会に関する価値を希求し続ける力が大切なのである。

次に、②体系的な思考力・代替案の思考力について説明したい。地球温暖化、熱帯林の消失、オゾンホールなどの地球環境問題、世界各地で頻発する紛争や蔓延する疾病、富の格差の拡大などの問題は複雑な問題である。一面的な見方で理解することはできないし、解決することもできない。ホ

リスティックに考え、表面的な現象の裏側に存在する核心に対する洞察も必要となる。そのような学習を支援・援助したり、先導したりする役割を担うためには、教員自身が体系的な思考力を備えている必要がある。また、ものごとを鵜呑みにせず、良質な批判をする能力、すなわち代替案を考え出す力も重要である。例えば、原子力発電所の問題を学習しているとしよう。原子力発電について発電所の事故を取り上げて、ただ反対であると考えを述べるのではなく、代替エネルギーの問題を深く掘り下げた学習ができることが大切なのである。その指導をする教員自身が、多様な見方や考え方を検討する姿勢をもっていなければ、学習を推進させることができないと考える。

③情報収集・分析能力についても、②体系的な思考力・代替案の思考力と同じことが言える。教師自身が、児童・生徒が学習活動で必要とされる力を備えていなければならない。ESDの学習はさまざまな方法で情報を入手することが求められる。書籍、新聞・雑誌、体験、観察、実験、フィールドワーク、アンケート調査、インタビュー調査、インターネットなどから大量な情報を入手することができる。ESDの学習では、大量な情報を精査し、分析することが必要である。

④コミュニケーションを駆使して、参加体験型の学習を指導する能力も重要である。ESDの学習は、知識を伝達だけの学習ではない。児童・生徒が自ら課題を見つけ、自ら考え問題解決していくことが求められる学習が、ESDでは重視されている。そのような学習活動を組織する能力が必要なのである。そして、そのような学習活動を支えるものがコミュニケーション能力で

ある。ESDの学習では、参加者が協力して、より良い結果を希求し、その過程で創造的な関係を構築していく、多田の「共創型対話」が重要な働きをする。

(2) ESDを推進するための教員研修

ESDを推進する教員としての資質能力を培うためには、以下のような教員研修が必要であると考えられる。

- ①持続可能な社会・発展に関する価値観を培う教員研修
- ②参加体験型学習アクティビティの体験型教員研修
- ③コミュニケーション・アクティビティの体験型教員研修
- ④参加体験型の学習によるESDの授業研究

順に説明したい。

まず、①持続可能な社会・発展に関する価値観を培う教員研修についてである。教員研修で、地球温暖化、熱帯林の消失、オゾンホールなどの地球環境問題、世界各地で頻発する紛争や蔓延する疾病、富の格差の拡大などについて、各自が調べたことを発表し合う方法を薦めたい。時間がとれないのであれば、朝の打ち合わせの時間に短く報告し合ってもよいと考える。その際、総合的に考えた自己の意見や問題に対する代替案を発表することになるとよい。さらに、学校の所在する地域の問題を総合的な学習の時間の授業で取り上げることを前提にして、地域調査を行うとよいと考える。そして、教育委員会や研究会主催の研修会、または校内研究会において、ESDに関する先進的な実践を紹介する講演会を行うことも考えたい。

次に、②参加体験型学習アクティビティ

一の体験型教員研修についてである。これは、参加体験型学習のアクティビティーを学ぶというだけではなく、アクティビティーを体験的に学ぶ中で、体系的な思考力、代替案の思考力、情報収集・分析能力を高めるのである。ブレイン・ストーミング、ウェビング、ロールプレイ、ランキング、ゲーム、シミュレーションなどのアクティビティーがよく紹介されている。

③コミュニケーション・アクティビティーの体験型教員研修については、児童・生徒の指導に活用できるアクティビティーを体験学習するとよいと考える。多田が開発したアクティビティーが大いに役立つ。また、「共創型対話」に関する理論的な研修も行うとよいであろう。

④参加体験型の学習による ESD の授業研究は、①②③の教員研修で培った知識、技能を総動員して行う授業研究である。

実際に ESD の授業やカリキュラムを創出する中で、教員の資質能力が高まってくると考える。ESD は、総合的な学習の時間や各教科の中だけではなく、学校の教育活動をホリスティックに統合して、ESD として教育成果を発揮していくのである。

(3) プログラムに必要な要素

本研究では、ESD の教育実践に対して強い意欲を持ち、ESD の教育実践とカリキュラム開発を推進しようとするミドルリーダーを養成しようと考えた。

そのためには、以下の要素が必要であると考える。

①ベテラン教員も若手教員も一緒になって、自由な雰囲気の中で新たな知見を見いだそうとする対話（多田が提唱する共創型対話）をする教員集団が成立

していること。

②支え合って協同的に実践研究を進めようとする同僚性が成立していること。

③ESD の考え方を理解し、根本的なことから授業実践を考えることができること。

④ESD の授業実践を推進する教員のロールモデルが存在すること。

⑤ESD の授業研究を通して、学習活動を楽しみ成長する児童・生徒の姿を直視していること。

(4) プログラム例 —夏期 1 日研修会—

夏期休業中に ESD を中心に据えた集中授業のような研修プログラムを企画し、その試行を通して研究を推進することにした。以下の内容のプログラムを実施した。

①オリエンテーション・ESD 理解

②アクティビティー指導

コミュニケーションアクティビティー
創作叙事詩

③授業実践例紹介

ESD 実践アイデアに関するディスカッション

ESD 実践アイデア・ブレインストーミング

ESD 実践アイデア・ランキング

④ESD 実践計画案づくり

カリキュラムデザイン曼荼羅

ESD 実践計画案づくり

※ 模造紙に計画を図示する。

⑤ESD 実践計画案発表

ESD 実践計画案発表（各グループ
5分）

振り返り

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

① 多田孝志、対話を活用した協同学習の研究、目白大学人文学研究、査読有、9巻、2013、203-220

② 多田孝志、対話型授業の研究 I、目白大学人文学研究、査読有、10巻、2014、231-249

③ 成田喜一郎、ESD カリキュラム及び授業デザインの理論と方法、東京学芸大学教職大学院年報、査読有、2巻、2014、1-15

[学会発表] (計3件)

① 中山博夫、グローバル時代の小学校現職教育の在り方、日本グローバル教育学会、2012年9月8日、同志社女子大学（京都府京都市）

② 中山博夫、ESD を推進するための教員リーダー養成プログラムの開発（経過報告）、日本学校教育学会、2013年8月3日、鳴門教育大学（徳島県鳴門市）

③ 中山博夫、ESD を推進するための教員リーダー養成プログラムの開発（経過報告）、日本学校教育学会、2014年8月9日、仙台大学（宮城県柴田郡）

[図書]

① 多田孝志・和井田清司・中山博夫 他、三恵社、グローバル時代の学校教育、2013、366 (323～335)

② 多田孝志・成田喜一郎 他、アルテ、ユネスコスクールによる ESD の実践、2013、254 (128～141、182～193)

③ 中山博夫・多田孝志・和井田清司・成田喜一郎 他、ESD（持続可能な開発のための教育）の推進－現場から進める ESD－

(科研成果報告書)、2015、124 (2～72)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 博夫 (NAKAYAMA, Hiroo)
目白大学・人間学部・教授
研究者番号 8 0 4 0 6 5 6 1

(2) 研究分担者

多田 孝志 (TADA, Takashi)
目白大学・人間学部・教授
研究者番号 5 0 3 4 1 9 2 0

和井田 清司 (WAIDA, Seiji)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号 5 0 3 4 5 5 4 2

成田 喜一郎 (NARITA, Kiichiro)
東京学芸大学・教職大学院・教授
研究者番号 8 0 4 5 6 2 5 1

(3) 研究協力者

林 敏博 (HAYASHI, Toshihiro)
横井 成美 (YOKOI, Shigemi)
吉村 恵美 (YOSHIMURA, Megumi)
稲垣 晃 (INAGAKI, Akira)
國府島 知子 (KOJIMA, Tomoko)